

令和 3 年度

1 自己評価及び外部評価結果

事業所名： 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(うめユニット)

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0393100128		
法人名	社会福祉法人 健慈会		
事業所名	認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(うめユニット)		
所在地	〒028-8202 岩手県九戸郡野田村大字玉川第5地割45-22		
自己評価作成日	令和3年7月20日	評価結果市町村受理日	令和3年11月15日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者様の「やりたい」「食べたい」を叶え、一人ひとりのこれまでの生活習慣をくみ取り、その方らしく毎日穏やかに生き生きと過ごしていける場所を目指しています。また、日々の生活の中で自分なりの日課や役割を持っていただくことで、誰かの役に立つ喜びや達成感を感じていただけるような支援を心掛けています。毎月職員と利用者様が一緒に楽しめるような企画を立てて実行し、その様子を記念に残して掲示板に貼っています。後から振り返って思い出話をする事で、相互の共通体験の中で利用者様と職員が声を掛け合いながら助け合って生活し、楽しく穏やかに過ごせるユニットです。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所の基本理念である家庭的な雰囲気づくりや地域や家庭との結びつきを重視する取り組みを、日々の介護を通じて実践することを心掛けている。コロナ禍のために地域との交流活動が大きく制限される中、地域向けの広報誌を各戸配布して、事業所の様子を積極的に知らせているほか、福祉避難所として地域住民の受入れ体制も整えている。また、利用者の人格を尊重するサービスという基本方針のもと、今年は「言葉遣い美化月間」の取り組みを行い、全職員で利用者の尊厳を意識したケアに取り組んでいる。更に、地域貢献事業として子どもの居場所づくりの「フリースペースゆい」の運営も始めており、地域にとって有意義な事業所となっている。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和3年9月29日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己	外部	項目	外部評価	
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営				
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	基本理念をユニット内の見やすい場所に掲示し、2カ月に1回のユニット会議の際に全員で唱和して共有している。また、基本理念に沿った事業計画やユニット目標を設定し、達成に向けて実践している。	事業所の開所時からの理念を基本としており、職員への浸透を図るためホールや事務室に掲示するほか、ユニット会議の際には全員で唱和している。また、2ヵ月毎に定める各ユニット目標には理念にある方針を取り入れて設定し、職員への浸透を図っている。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	昨年同様、コロナウイルス感染予防のため、例年行っていた交流会等は行うことができていない。窓越し面会の試行やぬくもり新聞(年8回)の発行など交流の機会を模索している。	地域の部落会に参加し、地域との連携と交流を大切にしている。コロナ禍のために様々な交流機会を休止しているが、そのような中であっても、ホームの広報を年4回、各戸配布してホームの様子を伝えている。この秋にはホームを会場にして地域の作品展覧会を計画している。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	例年は認知症カフェを開催し相談や支援の場としてきたが、今年度は行うことが出来ていない。特養と協働し子どもの居場所づくり事業として「フリースペースゆい」を運営している。	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナウイルス感染予防のため開催できない月もあったが、概ね定期的に開催している。出席者からいただいた意見をもとにサービス改善を検討している。また、今後は業務継続計画策定のためにも地域との協働が必要になることも議題として取り上げている。	地域の部落長や民生委員も委員として参加して開催している。コロナ禍のために今年は5月に開催したほかは、資料の送付のみとなっている。会議では、事業所の周知不足について意見が出されるなど、有意義な会議となっており、今後は書面開催とすることも検討している。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	地域ケア会議に参加し地域の情報共有や課題解決に向けた話し合い、事例検討会などの取り組みを行っている。	普段から役場内にある地域包括支援センターと連携しているほか、コロナ禍のため福祉課からはマスクや消毒薬、抗原キット等が交付されている。村主催で毎月の地域ケア会議にも毎回参加しており、地域の特養ホームや居宅介護支援事業所、消防等の関係機関と緊密に情報交換を図っている。
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	委員会体系を再編し、権利擁護委員会(身体拘束廃止・虐待防止)を設置し廃止に向けた話し合い、取り組みを行っている。外部研修に参加した際には伝達講習を行ったり、施設内研修を毎年開催し職員の知識・技術向上、意識啓発に取り組んでいる。	身体拘束廃止に関する指針を作成し、3ヵ月毎に委員会を開催している。防犯のために夜間は玄関に施錠しているほか、家族の了解のもとに利用者1名に転倒防止のセンサーマットを設置している。また、スピーチロック対策として、職員の美しい言葉遣い運動月間を設け、丁寧な言葉遣いを心掛けている。

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(うめユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	委員会体系を再編し、権利擁護委員会(身体拘束廃止・虐待防止)を設置し、虐待に対し常に意識した支援を行っている。施設で丸となって取り組めるよう、権利擁護ガイドラインの説明や研修等を企画している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者を中心に研修会に参加し学んでいる。支援の必要性のある利用者については、本人・家族と相談しながら必要な支援が受けられるよう対応している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所の際には事前見学の機会を設け、契約書や重要事項説明書は丁寧に説明するよう努めている。また、不安や疑問点についてはいつでも相談できるよう声をかけ、後日の電話相談にも対応できることを伝えている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族来設時や電話連絡の際には近況報告を行いながら家族からの意見も引き出せるような雰囲気づくりを心掛けている。また、家族及び本人に運営推進会議への参加を依頼し、意見をいただいている。	通院の付添いで来所した際に家族から要望等を伺うようにしており、コロナ禍での利用者の体調や面会の再開時期をよく聞かれている。利用者からは衣服の入れ替えや訪問販売のパンの購入希望などの要望があり、対応している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	隔月のユニット会議や委員会などの場で、職員から積極的に意見提案が出されケアや業務に反映させている。また、今年度より業務改善委員会を設置した。	2か月毎にユニット会議を開催し、職員の意見を聞いている。出席できない職員には資料を配布して意見提出を促している。職員からは夜間の尿パットの大小の見直しや肉料理を嫌う利用者には本人が見えづらい餃子料理を提供するなど、工夫した取り組みに繋がっている。	職員のモチベーションの確保や個人的事情の把握等のためには、職員と管理者との個別面談は必要な機会であると思われるため、年度末等に面談機会を確保されるよう期待したい。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	各職員の生活背景を理解し、労働条件を考慮した勤務時間や就労環境の整備に努めている。また、資格取得に積極的に取り組めるよう相談に応じている。		

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(うめユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	定期的に施設内外の研修に参加しスキルアップ出来る環境を整えている。個々のキャリアビジョンを確認しながら資格取得の機会を推奨している。職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握してフィードバックするための仕組み作りを検討している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナウィルス感染予防のため、対面における外部との交流は行うことが出来ていない。代用として遠隔会議システムを用いた会議参加やWEBセミナーの機会を設けている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前後には本人及び家族と面談を行い、意向や情報を確認しながら対応している。また、入所直後は細やかな声がけ、見守り、傾聴を行いながら不安を取り除き、生活の継続性が担保されるケアを心掛けている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族が相談しやすいよう、状況によっては本人とは別の場を設ける等考慮して対応している。また、来設時には近況報告を行ったり、不安の聴取、要望の確認を行っている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	インテーク段階で本人及び家族が必要としている支援の優先順位を整理し、必要に応じて関連法人で提供できるサービスや他の地域資源にリファーしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の個々の能力に合った作業やアクティビティを提案し、できることをしていただくことで共同生活を送っている。また、作業後には感謝の言葉を伝えることで笑顔になり、役割を感じていただくことの重要性を感じている。		

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(うめユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族と接する機会に積極的にコミュニケーションを図り、近況を伝えている。また受診は家族対応を基本とし、協力し合いながら支えあうようにしている。コロナ禍で疎遠にならないように日頃の様子が伝わるぬくもり新聞(年8回)を発行している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	現在はコロナ禍のため、面会や外出活動もできていない。施設内で以前からの知り合いや同郷の利用者様同士で交流できる機会を設け、できることを模索し支援している。また、窓越し面会を導入し関係継続支援に努めている。	馴染みに関する情報は、主に家族から伺い、カルテに記載して情報を共有している。コロナ禍で馴染みの関係維持に苦労しているが、少人数で利用者の馴染みの海岸沿いや自宅、場合によっては自分の名前が記載された船舶を見に外出している。今後はリモートでの面会を増やすなど、面会再開に向けて検討を進めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者様同士の関係性を観察し、これまでに培ってきた人間関係、社会とのかかわりを把握し、良好な人間関係を保てるよう支援している。必要な時は職員が間に入り声をかけ、円滑な関係を形成できるよう心掛けている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院や退所など、環境変化に伴い新しいサービスに円滑に移行できるよう本人の状態や習慣等を細やかに情報提供している。また必要に応じて問い合わせには応じる旨を伝えている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常の関わりの中で本人の表情や行動から、意向や希望を把握し可能な限り実現できるように努めている。内容によっては家族に協力を依頼することもある。	大半の利用者が思いや意向を言葉で話すことができしており、家族の話が出される時などは特に注意して意向や希望を聞き出している。また、担当職員のほか、相性の良い職員が聞き出すこともあり、ドライブに出かけた際に自宅を見たいとの要望を叶えたり、マツタケを食べたいとの要望に家族が採ってきたり、利用者の思いを事業所で共有して実現に取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所時にこれまでの生活歴や環境、サービスの利用状況等の情報収集を行っている。また、入所後も行動や言動、会話等から情報を得て職員間での共有に努め、個々の変化に合わせて対応している。		

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(うめユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の生活を観察し、個々のできること、できないこと、好きなこと、苦手なことなどの現状の把握に努め支援を行っている。徐々に変化していく状態を職員間で申し送りや連絡ノートで共有し、統一したケアに努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期ユニット会議やカンファレンスで課題について検討し、意見を出し合いながら現状に合った介護計画を作成している。また、必要に応じて家族と相談しながらケアに努めている。	介護プランはケアマネが原案を作成し、ユニット内のカンファレンスで検討のうえ決定している。モニタリングは2か月毎に担当職員とケアマネが行い、カンファレンスを経て、6か月毎を基本としてプランの見直しを行っている。利用者の通院同行に来訪した家族から介護計画の同意を得、職員には当該プランを回覧して情報を共有している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個々のカルテへ日々の関わり、観察等も大切に記録することで日常の支援に活かしている。また、業務ノートを活用することで、情報を共有し介護計画に活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	コロナ禍により受診対応できない利用者様の通院同行、面会制限に代替する窓越し面会など、本人・家族の意向に沿えるように柔軟な支援、サービスの提供に努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍により昨年より実施できていないが、例年はお祭り見学や、学校行事への参加、商店での買い物などで地域との関わり、楽しみを持てるよう支援している。また、消防署や消防団の協力を得ながら避難訓練を行っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	施設入所前から関わりのあるかかりつけ医の受診継続を推奨している。状態の変化等、必要に応じて専門医に診察が受けられるよう情報提供を行っている。	多くの利用者が入居前からのかかりつけ医を継続して受診しており、主に久慈市内の開業医や精神科に通院している。半数以上の方が家族同伴で通院しており、コロナ禍にあつて貴重な外出機会ともなっている。また、訪問歯科を利用しているほか、看護業務は併設の特養ホームの看護師が支援している。	

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(うめユニット)

自己	外部	項目	外部評価		
			自己評価 実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	定期的に看護職員が利用者の状態を確認している。気にかかることは随時相談し、情報共有が図れているため適切な対応を迅速に取れる状態である。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入退院時は家族、医療機関と情報提供・共有を行い円滑な治療を受けられるよう、また、退院後の生活に支障をきたさないよう連携している。北三陸ネットも活用し医療関係者と協働している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ADL低下時や看取り期を迎えた際には家族や医療機関と連携を図り、施設ではどのような対応が可能なのか話し合い対応している。施設機能として対応困難な場合は他サービスヘルパーできる体制を整えている。今年度ACPを導入できるよう計画している。	重度化した場合の対応については、入居時に説明し了解を得ているが、併設の特養ホームに住み替える例もある。看取りの取り組み事例はまだないが、併設の特養での取組みも参考として研修を重ねている。今後はACP(人生会議)活動も取り入れて、看取りの取組みを進めることとしている。	信頼のおける職員に囲まれて終末期を迎えられる看取りの取り組みは今後の大きなテーマであり、協力医師や訪問看護ステーション等との連携や職員の研修を重ねながら推進されるよう期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	利用者様のリスクを一覧にまとめ管理を行う事で個々のリスク把握に活かしている。定期的に心肺蘇生法や、救急時の対応方法の研修を行う事で実践力を身につけている。夜間救急時のフローチャートを改定することで急変時に備えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に避難訓練を行い、避難経路や利用者様の避難能力の確認をしている。常に物品の備えを行い、福祉避難所としての役割を果たせるよう心掛けている。	村のハザードマップでは水害等の災害想定地域に指定されていないが、年2回の火災避難訓練を実施している。以前は砂利道を避難経路としていたが、今年からは舗装道路に繋がる経路として改善している。村の福祉避難所ともなっており、食糧備蓄や発電機、コンロ簡易トイレ等を備えている。	

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉遣い美化月間を設け、常に意識して適切な言葉遣いに対応ができるよう心掛けている。馴れ合いにならないように気を付け、利用者様のプライベートな空間に出入りする際は言葉掛けを意識するように努めている。	利用者のプライバシー確保のため、特に入浴や排泄介助の際には、周りから判らないように声掛けする等、利用者の羞恥心に配慮している。また、今年7月と8月には「言葉遣い美化月間」として、全職員が丁寧な言葉遣いを心掛ける取り組みを行い、意識化を進めている。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	話しやすい雰囲気づくりに努め、利用者様同士の日常会話や職員との会話の中で、会話の内容や表情・行動から、本人の思い、希望を確認するように心がけている。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その日の心身の状態を見ながら本人の希望に沿い、食事や入浴に対応し、穏やかに過ごせるように支援している。大まかな日課は決まっているが、レクの参加や家事作業などは本人の意向を聞き、個々のペースに合わせて過ごせるよう見守りを行っている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	服装選び、散髪、身だしなみ等、本人の意向を確認し、こだわりや好みなど、これまでの習慣を尊重しながら、清潔を心掛け、季節・場所に適した衣類等の対応を行っている。また、馴染みの美容院に行ったり施設での散髪は本人や家族からヘアスタイルを確認し、その人に合ったおしゃれができるよう支援している。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者様の「これが食べたいな～」に対応するため、ホヤやマツタケ、流しそうめん、献立や誕生日メニューを取り入れ、食事を楽しんでいただけるようにしている。家庭菜園での野菜収穫や地元ならではの食材、個々の好み等を把握し、食べやすいよう工夫している。食事前後の手伝いも一緒に行っている。	献立作成や調理は職員が行い、利用者は食材の下ごしらえや後片付け、配膳等を手伝っている。敷地内の菜園では野菜を栽培し、利用者が成長を楽しんでいる。また、月1回はお寿司の日として外食を楽しむほか、週1回は村内の宅配弁当を利用したり、誕生日には行事食も提供し楽しまれている。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量、水分摂取量を都度把握し、個々の心身の状態、既往歴に沿い支援を行っている。水分補給時、ひとり一人の嗜好に合わせて提供している。			

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(うめユニット)

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	歯科医による定期的な検診を行うことで一人ひとりの状態に合わせて毎食後口腔ケアを行っている。本人の能力に応じ、声掛けや見守りをして適宜磨き直しをチェックしている。			
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者様個々の能力に合わせ、状態・習慣を観察し把握することにより、トイレでの排泄が続けられるよう、支援に努めている。能力に合わせた介護用品を使用し、残存機能を低下させないように検討して支援している。	利用者毎の排泄チェック表を作成し、トイレ誘導のタイミングを確認している。現在は、全体で布パンツの利用者が3人の他はリハビリパンツとパットで、オムツ利用者はいない。全員トイレを利用している。排泄に失敗した場合には、周りに気付かれないようサッと片づけるなど、特に配慮している。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎日の排便確認を行い、好みに合わせた水分摂取を促している。運動量への働きかけに加えて食物繊維が豊富なメニューを取り入れ、自然排便できるよう努めているが、必要な方には医師と相談し個々に合った便秘薬を使用している。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴の曜日は決まっているが本人の希望や体調により曜日を変更して対応している。本人のタイミングに合わせて、お湯の適温を把握、入浴の負担を減らせるように介助している。	入浴は週2回を基本としているが、本人が入りたくない場合には翌日にするなどして柔軟に対応している。家族持参のシャンプーや石けんを使用しており、季節のゆず湯や菖蒲湯も楽しんでいる。職員は会話をしながら、身体状況の観察も丁寧に行っている。入浴した際に体調に異変が生じても、医療機関での診察が可能なように、入浴時間を午前10時からと設定している。		
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	カーテンで明るさを調節したり、個々に合わせた環境を整え、安心して過ごしていただけるように工夫している。夕食後それぞれのペースで入眠できるよう見守り支援している。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	与薬マニュアルを見直し誤薬防止に努めている。与薬確認はダブルチェックを行い、変更時はカルテ・連絡ノート・申し送りで全員に周知できるよう努めている。			

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(うめユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人の能力に合わせた役割(茶碗拭き、モップ掛け、洗濯物たたみ、シュレッダー、食材配達など)を提案し、家事や活動の場で持っていただいている。また、行事やレクを企画し気分転換の機会を作り、孤立させることがないように日々支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍のため外出レクが制限されており、現時点では病院受診だけが外出の機会となっている。定期的にユニット菜園の手入れや草取りの際に中庭に出る機会を設けている。	コロナ禍で以前のような外出ができない状況にあるが、自宅を見に行きたい等の要望があれば、個別に職員が運転して外出支援している。また、敷地内の菜園の手入れや、すぐ前にある三鉄玉川駅まで散歩したりして、外気浴しながら気分転換を図っている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	管理困難な利用者様については施設管理しているが、外出や訪問販売の際は自ら選び購入できるよう支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望により電話対応し、年賀状を書いたり贈り物が届いたときには感謝を伝えることができるよう支援している。また、コロナ禍により精神的に不安定な時もあり、家族と協働して電話対応するよう工夫し、安心できるように支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食堂に展示している季節ごとの装飾は利用者様と職員と一緒に制作しており、季節を感じることができるようにしている。また、季節感がある花を飾ったり、室温の調整を行い快適に過ごしていただけよう努めている。共用スペースには行事の写真を飾り、振り返って楽しめるように工夫している。	共用のホールには、テーブルとイス、ソファが備えられ、大型テレビを見ながら利用者が寛いでいる。壁面には職員と一緒に制作した花火や七夕、鯉のぼりなどの季節感ある飾り付けがなされ、心が和むような工夫が見られる。多くの利用者は日中はホールで過ごし、昼食や夕食前にはラジオ体操も行うなど、毎日の生活を楽しんでいる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	本人が穏やかに過ごせるよう、テーブル・ソファの配置を工夫している。昔からの知り合い同士で談話したり、本人の落ち着く場所で新聞を読むなど、個々のペースで落ち着いて過ごせるよう配慮している。		

令和 3 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : 認知症対応型共同生活介護施設グループホームぬくもり(うめユニット)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好み のものを活かして、本人が居心地よく過 せるような工夫をしている	家族写真や本人の使っていた物を持ち込み、一 人の時間をゆったりと過ごせるよう工夫してい る。また、本人が使いやすいように動線を考慮 し、家具の配置を行っている。プライバシーに配 慮し訪室の際には声掛けに気を付けている。	居室にはベッドや箆筒、洗面台、エアコンが備付 けられており、利用者はテレビや衣装ケース、家 族写真、鏡等を持ち込んでいる。室内には作成し た折り紙や塗り絵も飾られ、居心地良い空間と なっている。清掃は職員が行っているが、利用者 の中には清掃やリネン交換を手伝う方もいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づ くり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わ かること」を活かして、安全かつできるだけ 自立した生活が送れるように工夫している	利用者様一人ひとりの力を把握し、安全安心に 生活できるよう環境整備に気を付けながら、でき ることの見守り、困難なことへの支援を行い、で きる限り自立した生活が送れるよう工夫してい る。		